

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい(ただし、本文を省略しているところがあります)。

東京のビルの地下室で稲を栽培していたところに、見学に行ったことがあります。稲についている虫を探しても、根元の水の中を探しても、虫が一匹も見つかりませんでした。担当者に「虫は一匹もいませんね」と言ったら、「あたりまえです」とあきれた顔で、ダンゲン^{だんげん}されました。私はさびしい田んぼだな、と思いました。稲はもつとさびしがっていたにちがいありません。でもなぜ、私はこういうふうに感じたのでしょうか。

それは、私たち百姓だけでなく、あなたもそう感じるのではないのでしょうか。稲は自然の生きものだと思っっているからでしょう。自然の生きものは、自然の中で、ほかの自然の生きものといっしょに生きていると思っっているからでしょう。

しかし、ほんとうに稲は自然の生きものなのでしょうか。田んぼは自然でしょうか。

この問いは、とても難問です。あとで答えたいと思いますが、その前に田んぼの中をのぞいてみましょう。田植えのとき、もうゲンゴロウやガムシやヒルやイモリやカエルが、水の中で泳いでいます。水の上ではアメンボやクモが歩きまわっています。どこから、どうやってやってきたのでしょうか。

しかし、ふだんはそんなふうには考えないでしょう。まず、「あつ、ゲンゴロウだ、アメンボだ」と思うだけで、その姿や泳ぎ方に目がい

くはずです。そして、そこにいるのがあたりまえで、自然なことのように感じるのです。でも、田んぼは百姓が開いたものです。田植えの前におこなう、田んぼに水を注ぎこんで、土と水をかきまぜてどろどろにしてしまう代かきも、百姓がおこなうものです。

このように人間の力でつくった場所に、自然の生きものが集まってくるということは、不自然でしょうか、それとも何の不思議もないことなのでしょう。あつ、また難問を言葉をかえてくりかえそうとしています。いけない、いけない。あとまわしにすると言ったのに。生きものに戻りましょう。ゲンゴロウもアメンボも代かき・田植えを、サツチして、どこから飛んでくるのです。だって、翅をもっていますからね。翅のないカエルやイモリは歩いてやってくるのです。

田んぼに集まってくるのは、ほかにいいいます。稲について、稲を食べる虫たちを「害虫」と呼びますが、イネクロカメムシ(稲黒亀虫)やイネミズゾウムシ(稲水象虫)、イネアオムシ(稲青虫)やイネツトムシ(稲苞虫)なども、めざとく越冬地からやってくるのです。とうぜんながらクモなどの、エキチュウもやってきますし、トビムシやユスリカ(蚊)などの害虫でもエキチュウでもない「ただの虫」もやってきます。虫だけではありません。カエルやトンボ、メダカやドジョウ、ツバメやシラサギもやってきます。どうして、田んぼに集まってくるのでしょうか。何か魅力があるからにちがいありません。

私は夏ミカンの栽培もしています。ミカン園では、よくアマガエル(雨蛙)を見かけます。ところが田植えの時期になると、まったく姿を消してしまふのです。田んぼへ産卵のために戻っていくのです。しかし、どうして田んぼの場所がわかるのでしょうか。

田んぼがある田舎に住んでいる人にはあたりまえに感じるのですが、代かきが始まると、その夜からいっせいにカエルが鳴きはじめるのです。前夜までまったく鳴かなかったカエルがやかましいほどに鳴き出すのですから、かなり不思議な現象です。日本のカエルの多くは、主に田んぼで卵を産みます。カエルにとつて、田んぼはよほど魅力的なのでしょう。その理由は何でしょうか。

それを考える前に、なぜカエルに田んぼの場所がわかるか、わかりましたか。カエルは生まれた田んぼに帰っていくのです。私のミカン園のアマガエルたちは、毎年田んぼとミカン園を往復しているのです。

(①) 私が今年、田植えをしなかったら、戻ってきたカエルたちはどうなるのでしょうか。カエルはじつと、生まれた田んぼの代かきを待ちつづけます。しかし、五日たつても、一〇日たつても代かきははじまりません。それもそのはず、私はその田んぼに今年は大豆をまくことにしているからです。アマガエルの寿命は長くて三年だと思われまふ。翌年も、そのアマガエルはやってきます。その年もまた私は田植えをしなかったとします。日本では田んぼの四割は、キユウコウしなければならなくなっているのです(一般的に田植えをしないことを、減反と呼んでいます)。そのアマガエルはさらにつぎの年もやってきますが、その年も私が減反したなら、カエルはたぶん私を恨んで死んでいくでしょう。

このように田んぼがあるからカエルは生きられるのではなく、代かき・田植えという百姓仕事がおこなわれているから、産卵できるのです。これはカエルにかぎったことではなく、トンボもゲンゴロウもメダカも稲の害虫たちも田んぼが大好きなのは、毎年規則的にくりかえされるこの百姓仕事に原因があるのです。

代かきが始まる前に雨が降って、田んぼにたっぷり水がたまつたとしても、カエルは鳴きません。なぜなら、デンコウが回復したら、田んぼの水は干上がってしまうことを、カエルは知っているからです。ところが、代かきしたあとの田んぼの水は、もう干上がることはありません。オスは安心して鳴き声をあげて、メスを卵を産むように誘います。しかし、代かきが終わったかどうかを、どうして見分けるのでしょうか。じつと代かきを待っているのでしょうか。

代かきは、田んぼの水と土をかきまぜて、どろどろにすることを言います。単に水をためただけではないのです。土が水に溶けて、濁ってきます。栄養たっぷりの水になると、ものすごい勢いで、植物性プランクトンが繁殖してきます。これはオタマジャクシの主食になります。

同時に、ミジンコ（動物性プランクトン）もいっぱい生まれてきます。これらは水の中の昆虫や魚の食べものです。

（ ② ）代かきによって、水で練られた土は壁土かべつちみたいになり、土粒と土粒とのすきまがなくなり、水を通しにくくなります。田んぼの水はたまったままになり、天気がいい日にはかなり温まります。三〇度を超こすことは珍めづしくありません。生きものが育ちやすい温度になるのです。

（ ③ ）一、生きものたちにとっては、代かき前とあとの水を見分けるのは、かんたんなことなのです。田んぼをそこに開いたということは、それまでそこにあった自然をつくりかえたことになります。しかし、つくりかえた新しい田んぼは、なかなか豊かな自然になったのではないのでしょうか。

（ ④ ）一、代かきをしないとカエルは鳴かないという話をしたら、私よりも二〇歳も年上の百姓から、「たしかにそうだな。でも、そんなふうには考えたことがなかったよ」と言われて、私のほうがびっくりしました。代かき・田植えが始まるとカエルが鳴き出すのは、あたりのことで、夏の風物詩で、季節を告げる自然現象であって、そのことと百姓仕事との関係を考えてはなかったという正直な告白でした。同じようなことは、赤トンボについても気づいていました。

一五年ほど前に、福岡県前原市（現在は糸島市）の老人クラブの百姓のお年寄りに、赤トンボ（ウスバキトンボ）のことを話したあとで、「赤トンボが田んぼで生まれることを知っていましたか」とたずねたことがあります。その回答は、表2・1のとおりでした。

今日の話ではじめて知った	43%
だれからか聞いたことがある	11%
田んぼで見て気づいていた	46%

表2・1 「赤トンボが田んぼで生まれていることを知っていましたか」への回答

私は信じられませんでした。多い田んぼでは四〇五株に一匹は生まれているトンボですから。たしかにヤゴからトンボに羽化するのは夜なので（田植え後三〇〜四〇日の、夜九時ごろから羽化が始まり、一二時ごろには終わります）、その場面は見たことはないでしょうが、そのままじつと稲の葉にぶら下がって朝を待ちます。早朝に田んぼに行くと、田んぼの中に脱け殻ぬががらとともにいっぱいいるのが見られるはずで

ところが、半数もの百姓は気づいていないのです。たぶん赤トンボの姿は見ていたでしょう。でもそれは毎年のことで、カエルの鳴き声と同じで、あたりまえの自然現象であって、田んぼで生まれることの意味や意義を意識することはなかったのです。赤トンボの命は自分の田植えや田まわりなどの百姓仕事によって支えられている、と考えることはなかったのです。

それはどうしてでしょうか。私は、これが日本人の自然観だったからだと思います。人間も自然の一員として、自然の中で一体となって生きていたときの名残なごりだろうと思います。それに対して、現代人は自然の生きものを、外から冷静に分析して、その生がどういう百姓仕事によって支えられているか、科学的に説明しようとしています。この違いをわかるように説明するのは、かんたんではないので、「自然」とは何かを説明するときに、くわしく話します。ここでは、自然の内側からの百姓の伝統的な見方と、自然の外側からの科学的な因果関係をはっきりさせようとする見方、の二つがあることを覚えておいてください。

みなさんはどちらの見方をするでしょうか。そんなことは考えたことはない？ そうでしょうね。

（宇根豊『農は過去と未来をつなぐ』より）

問一 波線部 a〜e のカタカナを漢字に直さない。

a ダンゲン b サツチ c エキチュウ d キュウコウ e テンコウ

問二 本文中の（ ① ）〜（ ④ ）に当てはまる語として最も適当なものを、次のア〜オのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ もし ウ むしろ エ したがって オ また

問三 傍線部 1 「そう感じる」とありますが、どう感じるのですか。解答欄の形式に合うように、その内容に当たる部分を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。（句読点等も一字として数えるものとします。これ以降の問題もすべて同じです。）

（ ）と感ずる。

問四 傍線部 2 「そんなふうに」とありますが、その内容として最も適当なものを、次のア〜エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 田植えのときに田んぼにいる生き物は、ほかの生き物といっしょに生きているのだというふうに。

イ 代かきをするときにはいなかった生き物は、どうやって田植えの時期を知るのだろうかというふうに。

ウ 田植えのときに田んぼにいる生き物は、いったいどこからやって来たのだろうかというふうに。

エ 代かきをするときにはいなかった生き物は、その姿や泳ぎ方にそれぞれ特徴があるんだというふうに。

問五 傍線部 3 「カエルにとって、田んぼはほとんど魅力的なものでしょう」とありますが、カエルにとって田んぼはどうして魅力があるのですか。その理由として当てはまらないものを、次のア〜エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 田んぼでは百姓仕事によって単に水がたまっているだけでなく、干上がらないように保たれているから。

イ 田んぼでは百姓仕事によってたまっている水が、あたたまって生き物が育ちやすい温度になるから。

ウ 田んぼでは百姓仕事によってたくさんの生き物が生まれてきて、オタマジャクシの主食も豊富だから。

エ 田んぼでは百姓仕事によって不規則なズレが生じ、そのリズムに合わせて産卵の時期を選べるから。

問六 傍線部4「私は信じられませんでした」について、

- X 「私」が「信じられ」なかったことは、次のうちどれですか。A〜Cのうちから一つ選び、記号で答えなさい。
 A 「今日の話ではじめて知った」という回答が43%もあったこと。
 B 「だれからか聞いたことがある」という回答が11%もあったこと。
 C 「田んぼで見て気づいていた」という回答が46%もあったこと。

Y Xで選んだ回答について、「私」は、老人クラブの百姓のお年寄りの回答がその数字となった理由をどのように考えていますか。八十字以内で説明しなさい。

問七 二重傍線部「田んぼは自然でしょうか」とありますが、この問いに筆者はどう答えると予想されますか。この文章全体を踏まえて、筆者の答えとして最も適当なものを、次のア〜エのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 百姓はもともとの自然をつくりかえることで田んぼを開いたので、田んぼは自然ではないといえるかもしれないが、百姓が自然をつくりかえてできた田んぼは、様々な生き物を育む自然だといえるのではないか。

イ 百姓はもともとの自然をつくりかえることで田んぼを開いたが、田んぼをつくるのが自然破壊だとは考えられず、むしろ自然を保護するという神から与えられた義務を果たしているの、人手が入っているとしても、田んぼは自然だといえるのではないか。

ウ 田んぼは自然の中にしか存在しないものであって、人工的な環境の田んぼなどありえないので、百姓が世話をするという人手が入っているとしても、田んぼはやはり自然だといえるのではないか。

エ 田んぼは稲を栽培するというもともとの目的から離れて、多様な生き物を生み出し育てるという自然の生き物の生活の場を作り出すことを目的としており、百姓仕事という人手が入っているとしても、田んぼはやはり自然だといえるのではないか。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（ただし、本文を省略しているところがあります）。

子供の頃、僕はとにかく負けず嫌いであつた。ジャンケンポン。僕が出したのはグーでもチョキでもパーでもない、そのどれともとれるようなもので、相手が出したのがチョキならば、微妙なタイミングで指を動かし、グーにしてしまうのだった。

小学校の高学年の頃に、僕よりも負けず嫌いな男の子がいた。小田原一馬は父親の仕事の関係で東京から転校してきた。転校初日の挨拶の時から、負けず嫌いが全身から※1はらばらに迸っていた。

「小田原一馬です。一馬とは一番早い馬という意味です。かけっこでは誰にもまけたことがありません」

勝ち誇ったような顔つきが男子から疎まれて、いつまでたってもクラスに馴染めず、なかなか友達ができなかった。可哀相だな、と思い、僕は一馬に声をかけた。

「同じ方向やけん。一緒に帰ろ」

一馬はうれしかったのだろう、僕んちで遊ぶ、と言った。一馬の家は立派な二戸建ての家だった。一馬の部屋には沢山の玩具があった。戦車や戦艦のプラモデルが部屋中とこせましと並べられていた。

「すごかね。全部おまえのや？」

一馬は、うん、と微笑み、戦争ごっこをしよう、と言ってきた。ところが

かれが僕に貸してくれたのは古ぼけた戦車と弱そうな戦艦だけであつた。これじゃあ勝負にならない、と抗議をすると、ダメだもんね、と言って喜んでいる。仕方がないので、両手に沢山のプラモデルを抱えているところを素早く攻撃していった。

「ああ、ずるい。卑怯だぞ」

「あなたが卑怯だ。1 そっちの方が卑怯やなか。そんなに沢山抱えとつても使えんとやつたらどげんしようもなかった」

結局その日僕たちは喧嘩をしてしまい、僕は「馬君を泣かしてしまった。自慢じゃないが、僕は今も昔も言葉では誰にも負けたことがない。子供の頃から、口げんか道十段なのであつた。とにかく、口げんかの場合、相手に考える隙を与えてはいけない。相手の弱点を見つけ出してそれを次から次に攻撃していくのである。」

「卑怯もん、男の風上にもおけん奴つたいね。おちんちんついでとかや？ いまだにおねしよばしとるとやなかと。おねしよばして押し入れに布団は隠しとつちやる。そっちが遊びに来てよつて言つたけん来たつちやるうが。遊びに来てやつたとに玩具も貸してくれんちゃけん、だけん、いつまでも学校になじめんとよ。友達ができんでもよかとね？ みんながおまえんこつばな」といふのか知ってるのか。あんまり東京東京つて言わんほうがよかつた。心ば入れ替えんと、これから大人になってからますます困るつたいね。ついでに、お前のかあちゃんべそー」

一言一言を投げかけるとき、ラッパがそうするように身振り手振りをまじえるのだ。宙を舞う華麗な掌の動きに相手の視線が止まってしまえば、もうこちらのもの。まもなく敵は圧倒的な言葉に打ちのめされ怯むことになる。怯んだらさらに次の言葉をぶつけるのである。容赦をはいけない。腕力に自信のある奴でも、言葉に圧倒された時には思考が停止してしまい、暴力が振るえなくなるものなのだ。

しかしここで一つだけ上手な口げんかの仕方をお教えしよう。最初は相手の弱点を攻めて、怯ませ、動けなくさせて、言葉の力で押さえ込むのがベストな戦略だが、最後までそれではいけない。相手を追い込むのは得策ではない。攻撃だけしていると、後味が悪いというものもあるが、恨みを持ち越すことになる。だから後半は、お前は決して悪い人間じゃない。ただ考えが甘いだけだ、と遠回しに味方になってやるのである。

お前は可哀相な奴なんだ、だから俺はお前の味方、世界でただ一人の理解者なんだ、と駒を進めるのである。すると恨みを翌日まで持ち越すことは少ないし、口げんかに勝ったという後味の悪さからこちらも抜け出ることが出来る。

それから口げんかの一番最後には必ず、お前のかあちゃんやべそ、と付けるのがもつとも ^{※2} ポビユラーな戦略である。何故、母ちゃんのでべそがないのかはいまだにわからないが、昔から口げんかの締めは、お前のかあちゃんやべそ、と相場は決まっているのである。決まっているものには逆らわない方がよい。

ちなみに、おねしよをして布団を押し入れに隠していたのは何を隠そうこの自分であった。僕は小学校の高学年までおねしよだったのだ。つまり口げんかにおいては、相手の弱点が見つからない場合、自分の弱点をさも相手の弱点のように投げつけてみるのも手だったりするのである。

「よか。泣けばよかった。うんと泣いてすっきりすればよかと。人生なんてそんなものだ。これで二人の友情は本物になるとよ」

その時、一馬のお母さんがお菓子を持って部屋に入ってきた。泣いている一馬を見つけて、どうしたの、と聞いた。一馬は僕を指さした。

「かずちゃんに何をしたの？」

お母さんは明らかに一馬の味方であった。最初から僕が悪いという態度であった。ありがちな、と子供ながらにがっかりであった。この子にしてこの親か、やれやれ。

「お母さん、これは子供の問題やけん、口ばださんでください」

まあ、と一馬のお母さんは唸った。

「一馬がお友達を連れてきたから珍しいと思つて期待していたのに、こんなおかしな友達を作っちゃいけませんよ。明日校長先生に抗議しますね」

一馬のお母さんは一馬を抱き寄せて、そう言つたのである。僕はあいた口がふさがらなかつた。なんで校長なんだろう、と考えた。このお母さんも

一馬同様負けず嫌いで、担任より校長の方が格が上だと思つていたのかもしれなかつた。

一馬の負けず嫌いはとどまるところを知らなかつた。とにかくなんでも自分が一番じゃなければ気が済まないのである。一番に給食を食べ、一番に宿題を提出し、テストも一番。確かに勉強は出来たし、運動も出来たが、^{※3} 擲毫をどどん買つていくのであつた。

そんなある日、一馬と番長のクニヤンとが言い合いになった。

「一馬、お前は誰よりも足が早いって自慢してはいるが、お前よりも早い奴がこの組にはおるったいね」

「ふん、僕よりも早い奴なんていないもんね」

「じゃあ、お前そいつと勝負してみてん。そして負けたら、明日坊主頭にしてこいや」

クニヤンのいう早い奴というのは、鹿児島から転校してきたばかりのゴワスこと新道考之^{たかみ}であつた。

ゴワスは見かけはとろかつたが、足だけは異常に早かつた。かくして放課後一同はグラウンドに集まつた。クニヤンが合図を出した。二人は一斉に走り出した。勝負は互角だったが、僅かにゴワスの方がリードしていた。最終コーナーに差ししかつた時のことである。突然二人は転倒してしまうのだった。二人の体が接触したからだったが、明らかに一馬がゴワスのシャツをひっぱつたのである。倒れた二馬はすぐに起き上がり一番でゴールインした。「てめえ、ゴワスのシャツばひっぱつたらうが」

クニヤンは怒つた。

「ひっぱらない。あれは事故だよ。でも僕は最後まで全力で駆け抜けた。やっぱ僕が一番だつて見せつけることができてうれい」

ゴワスがやつてきて、もう一度勝負しろ、と叫んだ。

「いや、だめだね。今の試合で僕は足を傷めた。これが直るまでは勝負はできない」

なんと負けず嫌いな奴。でも僕は ^{※3} ちよつとうれしくなつたのだ。こゝまで負けず嫌いだと気持ちがいいものである。僕は放課後、一馬と一緒に帰つた。

「なあ、今度は僕んちによつていかんね」

一馬は警戒していたが、ああ、と従つた。住宅の狭い部屋にあがると、一馬は家中を物珍しうに眺めた。こんなところで暮らしているの、気の毒だね、といわんばかりの顔つきで。玩具箱に戦車や戦闘機のプラモデルが沢山あるのを発見し、一馬の目に輝きがでた。

「戦争ごっこしようか」

「うん」

僕は丁度半分ずつになるようにプラモデルを分けた。ところが一馬は気に入らないのである。僕が持つていた ^{※4} スピットファイアーを取り上げ、しまいには ^{※5} シャーマン戦車も取り上げられてしまった。僕の手元にはジープと第一次大戦時の複葉機しか残らなかつた。

「ずるか。なんでそげん負けず嫌いや」

「だって、絶対に負けたくないもん。強いものが好きなんだもの」

「そんなんじやつまんやろうもん」

「つまる」

「返せ」

「いやだよ」

僕が一馬から戦車と戦闘機を取り上げようとしてしているとそこへ母さんがお菓子を持つて入つてきた。

「ヒトナリ！ なんばしよつと。お友達が来たら、半分ずつつていつも言うてるやろ。遊びに来てくれたんだから、^{※6} 気兼ねさせてはいかんよ。よいかね。わかつたよ」

一馬はきよとした顔で僕と母さんのやりとりを見ていた。母さんがお菓子を置いて出ていくと、

「辻君のお母さんは辻君のことを愛していないの？」

と聞いてきた。

「なんで？」

「だって、君が怒られてたじゃん」

そういうもののかな、と僕は一晚そのことについて考えた。一馬君の味方になつた一馬君のお母さんと自分の母さんとを僕は比較してみたのだ。一瞬、一馬君のお母さんの方が優しそうに思えたが、眠りに落ちながらも僕は首を横にふつた。母さんはいつでもどこでも、電車やバスの中でも、理不尽なことをしている子供には怒る。いいことをしている子供にはいつでもどこでも、電車の中でもバスの中でも、きちんと褒める。つまり ^{※7} 母さんの愛は広いのだ。そうか、そういうことか、やれやれ。結局、僕は安心して眠ることにしたのだつた。

一馬は転校してきてから僅か四カ月で再び転校することとなった。父親の仕事の関係だということだったが、一馬は僕にだけ事情をあかした。

「母さんがね、この学校は僕には合わないって言うんだ。僕の人格を歪める

つてさ。それで私立の学校に移ることになった」

僕は驚いたが、あのお母さんならやりかねないことであつた。

「でも、辻君。辻君とはなんだか友達になれそうな気がしてた」

別れ際、最後に彼が言った一言が僕はうれしかった。

(辻仁成『そこに君がいた』より)

「僕もそう思つたいね」

そう僕は笑いながら言った。

〔語注〕 ※1 迸っていた……勢いよく飛び散っていたということ。

※2 ポピュラー……世間に広く知られ親しまれているさま。

※3 輦轡……人からいやがられること。

※4 スピットファイアー……第二次世界大戦時にイギリス空軍が用いた戦闘機。

※5 シャーマン戦車……第二次世界大戦時にアメリカで開発・製造された戦車。

問一 二重傍線部X「鼻についた」、Y「気兼ねさせて」の意味として最も適当なものを、次の各群のA～Eのうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X「鼻についた」

A 変なにおいがした

I 人氣がなかった

U いやみに感じられた

E 軽べつしていた

Y「気兼ねさせて」

A 気をきかせて

I 気をつかせて

U 気を悪くさせて

E 気をもませて

問二 傍線部1「そっちの方が卑怯やなかか」とありますが、「僕」はなぜこのように言うのですか。その理由を九十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部2「僕はあいた口がふさがらなかった」とありますが、この時の「僕」の気持ちとして最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 誰が見ても明らかに一馬の方が「おかしい」行動をしているのに、普段の「僕」のことを全く知らないはずの一馬の母親に「おかしな友達」と言われ悲しい気持ち。

I 子供同士のけんかは自分たちの力だけで解決したいという「僕」の希望に一切耳を傾けないどころか、一馬にも事情を聞こうともしない一馬の母親の態度に怒る気持ち。

U 正しいことを言っている「僕」に対して、事情をよく聞かず一方的に責め続けた挙げ句、校長先生に抗議するとまで言い出す一馬の母親の言動にあきれる気持ち。

E どんな状況であっても必死に自分の息子である一馬をかばい、守り抜こうとする一馬の母親の姿を目の当たりにして、親子の愛の深さに感動する気持ち。

問四 傍線部3「ちよつとうれしくなった」とありますが、どうしてうれしくなったのですか。その理由として最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 一馬は、せっかく友達になろうとしてくれているクラスメイトを平気な顔をして出し抜く男だから。

I 一馬は、東京からの転校生なのにクラスメイトにこびることなく自分の主張を貫くことができるから。

U 一馬は、自分には到底思いつきそうにもないアイデアで一番を取りに行くすばらしい発想ができるから。

E 一馬は、周りにどう思われてもお構いなしにどういう手を使っても徹底して負けないようにするから。

問五 傍線部4「母さんの愛は広い」とありますが、これはどういうことですか。その内容として最も適当なものを、次のA～Eのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 一馬の母親は自分の子供である一馬をかばうばかりだが、自分の母親の愛は、すべての子供たちをよりよく導き大切にしているのだという。

I 一馬の母親は一馬を守ることに一生懸命であるが、自分の母親の愛は、「僕」をほめることによって「僕」のことを喜ばせ満足させるものだという。

U 一馬の母親は自分の子供である一馬だけに味方をしているが、自分の母親の愛は、より多くの子供たちのいいところを見つけて伸ばしているのだということ。

E 一馬の母親は一馬をかわいがってばかりだが、自分の母親の愛は、「僕」を厳しくしつづけると同時に「僕」の負けず嫌いを認めてくれるものだということ。

問六 傍線部5「うれしかった」とありますが、それはなぜですか。その理由を五十字以内で説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（ただし、本文を省略しているところがあります）。

エチオピアでの経験から話を始めよう。最初にエチオピアを訪れたのは、もう二十年近く前のことだ。ほとんど海外に出たこともなかった二十歳そここのころ。十ヵ月あまりの滞在期間の大半をエチオピア人に囲まれて過ごした。

それまで、自分はあまり感情的にならない人間だと思っていた。人とぶつかることもそれほどなく、どちらかといえば冷めた少年だった。それが、エチオピアにいるときは、まるで違っていた。

なにをやるにしても、物事がすんなり運ばない。タクシーに乗るにも、物を買うにも、値段の交渉から始まる。町を歩けば、子どもたちにおちよぐられ、大人からは質問攻めにあう。調査のために役所を訪れると、「今日は人がいないから明日来い」と何日も引き延ばされる。「ここじゃない、あっちの窓口だ」と、たらいまわしにされる。話がうまくいったと思ったら最後に※1 賄賂を要求される……。

言葉の通じにくさもあって、懸命に身振り手振りを交えて話したり、大声を出して ※2 激昂してしまったりする自分がいた。

村で過ごしているあいだも、生活のすべてがつねに他人との関わりのなかであって、ひとりのプライベートな時間など、ほとんどない。いい意味でも、悪い意味でも、つねにある種の刺激にさらされ続けていた。食事のときは、いつもみんなでひとつの大きな皿を囲み、「もつと食べろ」と声をかけあい、互いに気遣いながら食べていた。

村にはまだ電気がなかった。食後はランプの灯りのもとで、おじいさんの話に耳を傾け、息子たちと腹を抱えて笑い転げたり、マガオで驚いたり、にぎやかで心温まる時間があつた。

村のなかにひとり「外国人」がいることで、いろんないざこざが起きて、なぜこんなにうまくいかないんだと、涙が止まらない日もあつた。毎朝、木陰にテーブルを出して、前日の日記をつけるのが日課だった。ふと見上げると、抜けるような青空から木漏れ日がさし、小鳥のさえずりだけが聞こえる。さわやかな風に梢が揺れる。おばあさんが炒るコーヒーのいい香りが漂ってくる。自分はなんて幸せなんだろうと、心からうっとりした。

腹の底から笑ったり、激しく ※3 憤慨したり、幸福感に浸ったり、毎日が喜怒哀楽に満ちた時間だった。顔の筋肉も休まることなく、つねにいろんな表情を浮かべていた気がする。

そんな生活を終えて、日本に戻ったとき、不思議な感覚に陥った。関西国際空港に着くと、すべてがすんなり進んでいく。なんの不自由も、憤りや戸惑いも感じる必要がない。バスのチケットは自動券売機ですぐに買えて、数秒も違わず ダイコク ぴつたりに出発する。動き出したバスに向かって深々とお辞儀する女性従業員の姿に、びっくりして振り返ってしまった。

人との関わりのなかで生じる厄介で面倒なことが注意深く取り除かれ、できるだけストレスを感じないで済むシステムがつくられていた。

※4 おそらく、お辞儀する女性は感情を交えて関わり合う「人」ではなく、券売機の「ご利用ありがとうございます」という機械音と同じ「記号」だった。

つねに心に波風が立たず、一定の ※5 振幅におさまるように保たれている。その センレン された仕組みの数々に、※6 逆カルチャーショックを受けた。

そのうち、自分がもとの感情の起伏に乏しい「自分」に戻っていることに気づいた。顔の表情筋の動きも、すっかり ※7 緩慢になった。顔つきまで変わっていたかもしれない。いったい、エチオピアにいたときの「自分」は「だれ」だったのだろうか？ そんなことも考えた。

でも日本の生活で、まったく感情が生じないわけではなかった。テレビでは、新商品を センデン するために過剰なくらい ※8 趣向を凝らしたCMが繰り返し流され、物欲をかき立てていた。それまで疑問もなく観ていたお笑い番組も、無理に笑うという ※9 「を強いられている」ように思えた。そんなとき、ひとりテレビを観ながら浮かぶ「笑い」は、「感情」と呼ぶにはほど遠い、薄っぺらで、すぐに跡形もなく消えてしまう軽いものだった。

多くの感情のなかで、特定の感情／欲求のみが ※10 喚起され、多くは ※11 抑制されているような感覚。エチオピアにいるときにくらべ、自分のなかに生じる感情の動きに、ある種の「いびつさ」を感じた。どこか意図的に操作されているようにも思えた。

3 日本は、感情をコントロールしている社会なのかもしれない。

最初にエチオピアから帰国したときにもった ※12 違和感を、いまもときどき思い出すことがある。たぶん急に学生のひとり暮らしに戻ったことも関係していたと思う。

二十年以上を過ごしてきた日本の環境に、わずか十ヵ月のエチオピア滞在から戻って感じた「ずれ」は、いったいなにを意味しているのだろうか？

エチオピアのほうが「よい」と言っているのではない。いまもエチオピアの田舎に行くと、たまには誰とも会わず、ひとり快適な都会のホテルにこもって映画でも観ていたいと思う。町ゆく一人ひとりと顔を見合わせながら、毎回、握手したり、あいさつの言葉を交わしたりするのは、とても面倒くさい。

人類学のフィールドワークでは、他者との深い関わりのなかに ※13 身をゆだねる。気心の知れた人と過ごすだけではないので、ときに想像もつかない状況に立たされ、戸惑う。「フィールド」になじんだ身体は、今度は「ホーム」に戻って、また別の「ずれ」を経験する。

人類学は、この自分の居場所と調査地とを往復するなかで生じる「ずれ」や「違和感」を手がかりに思考を進める。それは、ぼくらがあたりまえに過ぎてきた現実が、ある特殊なあり方で「コウチク」されている可能性に気づかせてくれる。

人類学では「ホーム」と「フィールド」との往復が欠かせない。そして、その両者が思考の対象となる。人類学といえど、よく遠くの国の異文化について研究していると思われるが、人類学者はたんにフィールドの「かれら」だけを調査しているわけではない。

エチオピアにいくと、日本とは違う感情の生じ方を経験する。そこから、日本社会の感情をめぐる環境の特殊さに気づくこともできるし、それまで疑問をもたなかった「感情とはなにか？」という根本的な問いにも自覚的になれる。

人類学者が向き合う問いの多くは、最初から自分のなかにあるものではない。「ホーム」と「フィールド」を往き来するなかで、あるとき到来するものなのだ。

(松村圭一郎『うしろめたさの人類学』より)

〔語注〕

- ※1 賄賂……都合のよい取り計らいをする見返りとして得る不正な金品。 ※2 激昂して……怒って、ひどく興奮して。
- ※3 憤慨したり……ひどく腹を立てたり。 ※4 振幅……揺れ動く範囲。
- ※5 逆カルチャーショック……自国の習慣・生活・物の考え方などに他国との違いを感じて、ショックを受けること。
- ※6 緩慢に……変わり方がおそく。 ※7 趣向を凝らした……おもしろみを出すための工夫をした。
- ※8 喚起され……呼び起こされ。 ※9 抑制されて……おさえとめられて。 ※10 違和感……しっくりこないという感覚。

問一 波線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

a マガオ b テイコク c センレン d センデン e コウチク

問二 二重波線部 X「たらいまわしにされる」・Y「身をゆだねる」の本文における意味として最も適当なものを、次の各群の A～E のうちからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

X「たらいまわしにされる」

A 冷たくあしらわれる

I しぶしぶ対応してもらう

U 偉そうに振る舞われる

E 次々に送り渡される

Y「身をゆだねる」

A 違いを見つける

I 関心を強く向ける

U 自らをすっかり任せる

E 新しい考えを身につける

問三 傍線部 1「それが、エチオピアにいるときは、まるで違っていた」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の A～E のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 日本ではエチオピアの社会にある程度の関心しかなかったが、実際に生活する中で自分が考えていた以上に興味がわいたということ。

I 日本では周囲の出来事に無関心であることが多かったが、エチオピアで生活する中で不正を許さない正義感に目覚めたということ。

U 日本では決断を先送りしていたが、状況があわただしく変化するエチオピアではすばやく決断することの大切さを自覚したということ。

E 日本では感情が揺さぶられることは少なかったが、エチオピアの生活では考えや思いがさまざまに揺れ動くようになったということ。

問四 傍線部 2「おそらく、お辞儀する女性は感情を交えて関わり合う『人』ではなく、券売機の『ご利用ありがとうございます』という機械音と同じ『記号』だった」とありますが、筆者には「お辞儀する女性」がどのように見えたのですか。その説明として最も適当なものを、次の A～E のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 人間本来の対等の立場からではなく、バスを利用している人にへりくだった立場でお辞儀をしているように見えた。

I 感謝の気持ちを表すというよりも、バスを利用している人に決められたやり方でお辞儀をしているように見えた。

U 様々なやり方がある中で、バスを利用する人が最も快適になるように心がけてお辞儀をしているように見えた。

E 相手によって差をつけず、バスを利用してくれる人には同じように心をこめてお辞儀をしているように見えた。

問五 「」に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の A～E のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 真実

I 不安

U 反応

E 本能

問六 傍線部 3「日本は、感情をコントロールしている社会なのかもしれない」とありますが、このことに関して筆者はどのように考えていますか。その説明として最も適当なものを、次の A～E のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

A 感情がコントロールされているかもしれない日本では、ストレスを感じないですむという利点があることを認めながらも、もっと素直に感情を表すべきだと筆者は考えている。

I 感情がコントロールされているかもしれない日本で過ごしていると、エチオピアのような社会に適應することは不可能であると筆者は考えている。

U 感情がコントロールされているかもしれない日本の状況には、ある種の狙いが感じられ、そこに他国との違いが存在すると筆者は考えている。

E 日本では感情がコントロールされているかもしれないことに気づくと、それ以降はそのコントロールから逃れ、本当の感情が持てると筆者は考えている。

問七 傍線部 4「人類学者が向き合う問いの多くは、最初から自分のなかにあるものではない」とありますが、これはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

国語科(中)

国中平
31

解答用紙

受験番号の記入欄は左端にあるので、忘れないこと。

問七	問六				問四	問三	問二	問一	
	Y				X		①	a	
							②		
					問五		③	b	
							④		
					と 感 じ る 。		d		
								e	

問六		問三	問二				問一										
								X									
								問四		Y							
											問五						

問七		問三	問二	問一								
			X	a								
			問四			Y						
				問五								

受験番号